

令和 2 年 6 月 23 日現在

機関番号：32621

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2019

課題番号：15K02794

研究課題名(和文) 英語教員に必要とされる英語運用力の評価・診断のための授業観察システム開発

研究課題名(英文) Developing the system of classroom observations for assessing and diagnosing EFL teachers'

研究代表者

渡部 良典 (WATANABE, YOSHINORI)

上智大学・言語科学研究科・教授

研究者番号：20167183

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：中学校、高等学校では公開授業その他さまざまな機会に授業研究が行われる。その際教育庁の職員および大学教員が観察をして授業担当者を交えてコメントを伝えるといった方法が行われている。しかしながら、このような方法が現職教員の指導力養成に結びついているのか、授業を観察される側の教員の望む方法なのかどうかは十分に理解されていない。本プロジェクトでは、現職教員と懇談会を開き、聞き取り調査を行い、さらにアンケートを実施し、現職教員が従来の授業研究をどのように捉えているのかを明らかにし問題点を特定した。その上でより充実した授業研究を行うための方法を教育学および第二言語習得研究の観点から提案した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

現職の中等教育英語教員にグループ面談とアンケート調査を行い、現在行われている授業研究に関する問題点を特定し望ましい研修の在り方を明らかにした。一方、言語教育研究において授業観察の方法および学習者理解の方法に関する実証研究が国内外で広く行われ、その有効性について効果が検証されている。本研究では、上記調査から得た情報をもとに、現職教員のニーズに合った効果的な授業研究の方法を体系的に解説することにより、これまで乖離する傾向のあった学術研究の成果と日々の指導の実践の実践と研究の成果の橋渡しをした。また教員が調査に協力者として参加すること自体が研修の機会となるよう配慮しアクション・リサーチの一環とした。

研究成果の概要(英文)：It is commonplace to conduct classroom observations in English classrooms at secondary level education in Japan. In so doing, each school invites experts from the board of education and the university to ask them to observe the class and provide teachers with feedback at a post-observation meeting. However, it is yet to be established how useful this type of practicum is for teachers to develop their expertise. The purpose of present project was to identify the range of problems in-service teachers might have been experiencing with this type of teacher development sessions by conducting focused-interview and questionnaires in various parts of the country. In light of the findings that were made through quantitative and qualitative analyses of the data, the range of methods were suggested from the fields of general education and language education to help organise effective teacher development programmes, which may comprise Action Research in the future more fruitful project.

研究分野：外国語教育評価

キーワード：英語教育 授業研究 英語教員の授業力 授業観察の方法 アクション・リサーチ

1. 研究開始当初の背景

申請者渡部と研究協力者加納は、大学の教員として小学校、中学校、高等学校から授業観察を依頼されることが多々ある。事前に教材と指導案が観察者の手元に届けられ、授業観察の前までに日程上の余裕があれば授業担当者にコメントを付けて返答。余裕がない場合は指導案および教材をもって授業観察に臨む。授業後担当教員を含めた英語担当教員および適宜他教科の教員、他校の英語教員と共に討議を行い、観察者としてコメントを述べ、授業担当者以外の参加者から質疑応答が続く。授業観察者にとっては現場の教員と触れ合う貴重な機会であり、また授業担当教員にとっては自らの指導法を客観的に評価しさらに発展させる機会となる。

しかしながら、私たちはこのような教員研修のあり方について多々問題があると感じてきた。詳細な観察記録を取っても直接手渡して詳細を説明する機会がない、観察者からの一方的なコメントで終わる場合が多く、討論にまで発展しない等であるが、特に観察者、授業担当者、その他の参加者それぞれが共通の語彙を持たないので、主観的な観察結果をその場でやり取りするのに終始することが多く十分に生産的な時間となっていないことが大きな問題点として認識していた。私たちの調査とは別に、近年英語教員に必要とされる英語力が話題とされることが多く、『英語教育 2014 年増刊号』（大修館書店）は、特集記事を組み、アンケートの結果、即興でのやり取り、英語での質問力、パラフレーズできる力、授業のマネジメント（指示等）、フィードバック力、モデル英文執筆、スモール・トーク等を挙げている。しかしながら、これらはあくまで教員の立場の観察であり、学習効果を上げるための条件なのかは不明である。これらの能力が必要とされているのは具体的にどのような場面なのか、できる教員とできていない教員は具体的にどのように違うのか。指導力向上に努められるような観察システムを開発する必要があると認識し今回申請のテーマに至った。

本研究は、本報告書は2部から構成されている。第1部は授業研究のあり方に関する聞き取り調査およびアンケート結果の分析である。望ましい効果的な授業研究の条件を探った。第2部は授業研究の方法である。学習状況の把握の仕方、授業方法の客観的な分析方法等の理論的考察、質問の方法や誤りの訂正等実践的な指導法等、第二言語習得理論研究の中でも特に授業研究と係わりのあるトピックを選んだ。

なお、本報告書は別に作成した冊子（本体105頁）の抄録である。本文中[参考資料]と記したのは本体冊子に掲載した資料を指している。

2. 研究の目的

本研究は次の2つの目的をもって行われた。第一に、教員研修とくに授業研究のあり方について参加者である教員自身がどのようにとらえているかを検証することである。第二に、意義のある教員研修と授業研究を行うための方法を、国内外で報告されている実証研究をもとに実行可能な形式でまとめることである。

3. 研究の方法

第一部：懇談会での聞き取り調査および質問紙の分析

懇談会およびアンケートの実施について

現職教員との懇談会による情報収集。会合は仙台、福井、香川、長崎、鹿児島県の6県で行われた。参加人数、参加者の背景、場所、日時は表1に記載の通りである。参加協力にあたっては、参加者の一人の大学教員、教育委員会指導主事に依頼し趣旨に合う高校教員を推薦してもらった。アンケートの実施については表2に記載の通りである。

表 1 懇談会、アンケート実施の詳細

開催地	参加者数	開催日時	実施時間	開催場所
仙台	5名	2019年10月12日	3時間10分	仙台市『一社法人労働福祉センター・ハーネル仙台』
福井	5名	2019年8月4日	2時間40分	福井市『福井市地域交流プラザ』
香川	6名	2019年9月22日	2時間45分	香川大学教育学部
長崎	6名	2019年9月28日	2時間30分	長崎市『松藤プラザ・えきまえいききひろば』交通会館
鹿児島	5名	2019年8月24日	2時間50分	鹿児島県立甲南高校

表 2：教員研修におけるアンケート実施の詳細

岐阜	49名	2019年8月22日	令和元年度岐阜県東濃地区小中学校英語研究会第1回研修会 於岐阜県多治見市とうしん学びの丘"エール"研修棟
上智大学	22名	2019年8月22日	教員免許状更新講習会 於上智大学四谷キャンパス

懇談会における意見およびアンケートのまとめと解釈

分析の方法

懇親会での参加者の発言、アンケートの分析、両者の解釈は次の手順をとって行った。

- 1) 懇親会は参加者の許可を得た上でDVDにすべて録画。
- 2) 録画を見直し参加者の発言の要旨をまとめる。[参考資料A]各地域における懇談会のまとめ、および[参考資料B]懇談会のまとめ参照。
- 3) 地域ごとにまとめた要旨をさらに精査し、共通した傾向を特定。
- 4) 懇談会で実施したアンケートの結果を分析。[参考資料C]参照。
- 5) 懇談会の結果とアンケートの結果を合わせて解釈。

4. 研究成果

懇談会およびアンケートの比較検討の結果

望ましい授業研究とはどのような特徴をもっているかー懇談会とアンケートに共通して見受けられた特徴

- 授業者、観察者ともに前向きになれるよう、お互いが成長しあえるよう、授業者の伸びしろ、改善点、可能性に言及したコメントを言い合う。[意見まとめ1、アンケート50、56、65]
- 授業者や授業公開校が観察者に注目してもらいたい点を指導案の中で明示することで、意見交換会の中でその点について話題にあがるようにする。[意見まとめ3、4、アンケート11]
- コメントの一方通行や個人的な授業者への攻撃的なコメントをさけるためにフィードバックの循環や建設的な意見交換を行う。[意見まとめ5、アンケート27、78]
- 質の良いコメントを引き出すための工夫が必要。[意見まとめ6、アンケート77]
- 研究授業の活性化、活発化のための同僚性の大切さ。[意見まとめ7、アンケート65、66]
- 課題意識、授業研究の共有化。[意見まとめ8、アンケート59]
- 研究授業活性化、活発化のための組織化、リーダーシップの大切さ。[意見まとめ9、アンケート65、66]

注．意見まとめの番号は参考資料B、アンケートの番号は参考資料Cを示す。

アンケート、平均が 3（その通りだと思う）をこえている項目

		M	SD	M-SD	M+SD
5	単元指導計画と学習指導案と教材をセットで用意する。	3.107	0.981	2.126	4.087
7	学習指導案と教材は、事前に参加者に配付しておく。	3.173	1.070	2.103	4.243
11	授業でコメントがほしい点を示して、その視点からの意見がもらえるように工夫しておく。	3.053	1.005	2.047	4.058
20	生徒の知識の習得がうまくいっているかどうかについてのコメントがほしい。	3.053	0.943	2.110	3.996
21	生徒の技能の習得がうまくいっているかどうかについてコメントがほしい。	3.200	0.870	2.330	4.070
23	教材の作成について参加者の日頃の工夫を紹介しあう機会がほしい。	3.118	1.070	2.048	4.189
25	評価の方法など技術的な話題が含まれるとよい。	3.263	0.661	2.602	3.924
26	ペア・グループなどの活動形態に関する話題が含まれるとよい。	3.093	0.903	2.190	3.996
27	授業を公開するときは、かならず何らかのコメントを授業者にフィードバックするシステムであるのがよい。	3.434	0.639	2.795	4.074
50	授業者のよりよい変容・成長についてのコメントがなされる	3.092	0.867	2.225	3.959
56	互いに育て合うという意識をもって発言する機会がほしい。	3.500	0.530	2.970	4.030
59	個人的な課題というより、教員間にある共通課題を明示して互いに意見交換をするのがよい。	3.122	0.906	2.216	4.028
65	先輩教員は、後輩教員の可能性を引き出すようなスタンスで発言するのがよい。	3.054	1.045	2.009	4.099
66	先輩教員は、経験を積み上げたノウハウやコツを添えて発言するのがよい。	3.243	0.919	2.324	4.162
77	失敗は隠さないのがよい。	3.351	0.560	2.792	3.911
78	一方通行を避け、フィードバックの循環の大切さを共有するよう促すのがよい。	3.311	0.639	2.671	3.950

注．4. 全くその通りだと思う； 3. その通りだと思う； 2. そうは思わない； 1. 全くそうは思わない； 0. どちらとも言えない

考察

- 先生方の意見まとめとアンケートと項目は類似する点が多い。特に授業研究の行い方や公開授業後のコメントの出し方に注目が大きい。前向きなコメントが双方から出るようにするべきだという声があることは、公開授業での批判的なコメントが授業者一人が受け止めなければいけないケースがあることがうかがえる。質の良いコメント、授業者も観察者も前進できるような授業公開にするには研究授業の体制が問われる。そのために、研究授業は学校全体もしくは教科全体のチームとして取り組むものであり、そのために普段から授業課題を共有する同僚性が発揮できる環境づくりが必要であると捉える。
- 公開授業後のコメントの内容として 1 つの授業から見える教科指導力だけではなく、教材づくりや学校の課題、教科の課題など授業だけでは見えないものを共有しあえるようなもの良いという意見もある。授業だけから見えないものを共有するためには、学校としての研究授業に取り組む組織体制が整うことで可能になる。つまり、リーダーシップを発揮できる立場である管理職、授業研究を担当する校務分掌、そして年配や先輩の教員の力量が大いに期待されていることがわかる。
- 教員の勤務体制、勤務内容の変化により授業研究を行うにあたって授業力だけの研究ではなくなっていることがアンケートや先生方の意見からうかがえる。教員同士、生徒同士、教員と生徒の人間関係、そして教員や生徒の多種多様な価値観をどのように授業研究に反映させていくかという課題が見える。
- ディスカッションに参加した学校の先生方は選抜された先生方とはいえ、多忙な中政府や教育委員会の見解、授業研究の自分の取り組み方、学校の取り組み方を冷静に分析し、直面している課題を捉えている。しかし、自ら取り組むことよりも組織や周りの環境が変えてくれることを期待している意見が多数であることから、組織的な改革や変容が先生方の意識を変えるのに効果的である。

第二部：対処法解説の見出し

実行に移すためには、これらを具体化し教員研修等で観察の方法として習得する機会を作り、指導力養成に結びつけることが肝要となる。教育学および第二言語習得研究においてはこれまでに様々な授業研究の方法が研究され開発されてきた。第二部では、第一部と実証研究で行われてきた成果の橋渡しをすることを目的とする。なお、ここに掲載したのは申請者の所属する上智大学言語科学研究科で開講しているクラスルーム・リサーチの成果を受講生がまとめたものを改訂しながら本研究に反映させたものである。タイトルとなっている Teaching by Principles in EFL Classrooms は当該科目において当初作成を予定していた冊子のタイトルである。

1. 発問の方法 Questioning strategies in the classroom
2. 動機付け効果の検証 Motivating learners in the classroom
3. 学習状況把握の方法としての学習者日記 Diary studies (1) - 理論
4. 学習状況把握の方法としての学習者日記(2) - 方法
5. 教室内学習者評価 Assessing learners in the classroom
6. 生徒の発話の誤りの対処法 Treating learners' errors in the classroom
7. 生徒は何を学んだかを簡単に調べる方法 Using Uptake Recall Chart in the classroom
8. 授業活動の定量分析 Using COLT observation scheme in the classroom
9. 授業でのインターアクション・パターンを検証する Turns, topics and tasks
10. 文字起し資料を作成する Transcription
11. 生徒とのラポールをどう築くか Building rapport with learners
12. 授業における生徒の不安の対処法 Anxiety and competitiveness
13. 質疑応答の方法 Questions and interaction
14. ティーチャー・トークの特徴 Teacher talk
15. 誤りの訂正とフィードバック Corrective feedback

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計12件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 加納幹雄	4. 巻 47
2. 論文標題 英語教師の省察と授業改善に関する研究	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 中部地区英語教育学会紀要	6. 最初と最後の頁 41-48
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 渡部良典	4. 巻 1
2. 論文標題 [誌上ワークショップ] 小学校英語の指導と評価をどうつなげるか [4] 「読むこと」の指導と評価の一体化（田縁真弓 / 渡部良典）	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 英語教育	6. 最初と最後の頁 54 - 55
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 渡部良典	4. 巻 3
2. 論文標題 [誌上ワークショップ] 小学校英語の指導と評価をどうつなげるか [6] 小学校英語の「評価」のあり方とは（畑江美佳 / 渡部良典）	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 英語教育	6. 最初と最後の頁 54 - 55
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 加納幹雄	4. 巻 64
2. 論文標題 英語授業デザインの考え方	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 グローバル人材に求められる英語力の育成	6. 最初と最後の頁 105 - 118
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 加納幹雄	4. 巻 952
2. 論文標題 高等学校学習指導要領実施上の課題と改善	5. 発行年 2015年
3. 雑誌名 中等教育資料	6. 最初と最後の頁 34-39
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 渡部良典	4. 巻 11
2. 論文標題 小学校英語の指導と評価をどうつなげるか「2」	5. 発行年 2015年
3. 雑誌名 英語教育	6. 最初と最後の頁 54-55
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 渡部良典	4. 巻 12
2. 論文標題 小学校英語の指導と評価をどうつなげるか「3」	5. 発行年 2015年
3. 雑誌名 英語教育	6. 最初と最後の頁 54-55
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 渡部良典	4. 巻 1
2. 論文標題 小学校英語の指導と評価をどうつなげるか「4」	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 英語教育	6. 最初と最後の頁 54-55
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 渡部良典	4. 巻 2
2. 論文標題 小学校英語の指導と評価をどうつなげるか「5」	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 英語教育	6. 最初と最後の頁 54-55
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 渡部良典	4. 巻 3
2. 論文標題 小学校英語の指導と評価をどうつなげるか「6」	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 英語教育	6. 最初と最後の頁 54-55
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 渡部良典	4. 巻 増刊号
2. 論文標題 平成31 (令和元) 年度全国学力・学習状況調査	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 英語教育	6. 最初と最後の頁 87-90
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 渡部良典	4. 巻 11
2. 論文標題 平成31 (令和元) 年度全国学力・学習状況調査から見た中学生の英語力	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 英語教育	6. 最初と最後の頁 68-69
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計16件（うち招待講演 13件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 渡部良典
2. 発表標題 学習者を育てるためにテストを使う
3. 学会等名 British Council英語教育セミナー（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 渡部良典
2. 発表標題 Assessing language in the framework of three-dimensional model of language learning
3. 学会等名 KELTA (the Korea Language Testing Association) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 渡部良典
2. 発表標題 入試、教育、英語指導学びを育む学習評価
3. 学会等名 ELPA英語教育フォーラム（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 加納幹雄
2. 発表標題 これからの英語指導の方向性
3. 学会等名 第5回岐阜東濃地区小中英語教育研究会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 加納幹雄
2. 発表標題 小学校英語教育実践者の経験知と意識変容に関する研究
3. 学会等名 第17回小学校英語教育学会神戸大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 渡部良典
2. 発表標題 学びを育む学習評価
3. 学会等名 文部科学省・埼玉県教育委員会委託事業 英語教育強化推進事業（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 渡部良典
2. 発表標題 パフォーマンステストの「実践」と理論
3. 学会等名 英語教育公開シンポジウム、平成28（2016）年9月10日（招待講演）
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 加納幹雄
2. 発表標題 高等学校英語教員に求められているプレゼンテーション力について
3. 学会等名 平成28年度いしかわ師範塾（招待講演）
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 加納幹雄
2. 発表標題 小学校英語のこれまでと小学校英語のこれから
3. 学会等名 日本児童英語教育学会 (JASTEC) 中部支部冬季大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 加納幹雄
2. 発表標題 台湾における小学校英語教育の現状
3. 学会等名 岐阜県東濃地区小中英語教育研究会 (招待講演)
4. 発表年 2015年

1. 発表者名 渡部良典
2. 発表標題 テスト、シラバス、CEFR：学習者のためのテスト評価をデザインする
3. 学会等名 国際基督教大学日本語教育研究センター (招待講演)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 渡部良典
2. 発表標題 CLILのためのシラバス開発
3. 学会等名 日本語教育CLIL研修会 (招待講演)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 渡部良典
2. 発表標題 Developing and Implementing CLIL Course at Higher Education: The Case of Sophia University
3. 学会等名 高等教育におけるCLILの実践と評価（招待講演）
4. 発表年 2015年

1. 発表者名 渡部良典
2. 発表標題 教育の一環としての大学入試大学入試と語学教育
3. 学会等名 独文学会ドイツ語教育部会（招待講演）
4. 発表年 2015年

1. 発表者名 渡部良典
2. 発表標題 中学生は何が出来て何が出来ないのか
3. 学会等名 日本アクティブ・ラーニング学会第4回研究大会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 渡部良典
2. 発表標題 Learning to be assessment-literate: Critically analysing the results of the 2019 nationwide English examination
3. 学会等名 British Council New Directions（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 加納幹雄	4. 発行年 2017年
2. 出版社 明治図書	5. 総ページ数 208
3. 書名 中学校新学習指導要領の展開（金子朝子・松浦伸和編）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担者	加納 幹雄 (KANO MIKIO) (70353381)	岐阜聖徳学園大学・教育学部・教授 (33704)	